615.789:612.115

諸種痙攣毒ノ血液凝固竝ニ血餅凝縮カニ及ボス影響

岡山醫科大學藥物學教室(主任奧島教授)

篠崎憲吉

內 容

- 1. 「ピクロトキシン」
- 2. 「サントゾール」
- 3. 「ストリヒニン」
- 4. 「コデイン」

- 5. 「テバイン」
- 6. 「カフエイン」
- 7. 「アンチピリン」

緒言

座撃毒ニハ痙攣中樞ノ與奮ヲ起スモノト、主トシテ脊髓ニ働キテソノ反射與奮性ヲ亢進セシムルモノトアリ、而シテ「ピクロトキシン」、「カンフル」並ニ「サントニン」等ハ前者ニ屬シ、「ストリヒニン」、「テバイン」並ニ「テタヌス」毒素等ノ後者ニ屬スルハ周知ノ事實ナリ、然レドモ各種痙攣毒ノ侵襲點ニョル分類等ニ至リテハ未ダ統一セラレザルガ如シ、家鬼ニ對シ痙攣ヲ起シ得ベキ物質ノ中、既ニ血液凝固ニ對シー定ノ影響ヲ及ボスコトヲ證明セラレタルモノ少カラズ、即チ當教室ニ於テ「アトロピン」ニ就テハ田中¹)、「コカイン」及ビ「ニコチン」ニ就テハ高月²)³)、「グアニヂン」及ビ「カンフル」等ニ就テハ余⁴)5)ガ曩ニ報告セシ所ナリ、而シテ何レモ血液ノ凝固性ニ一定ノ作用ヲ呈スルノミナラズ、自律神經系統ノ血液凝固性ノ調節ニ一定ノ關係ヲ有スルヲ闡明ニシ、薬理學的ニ重要ナル意義ヲ有スルヲ明ニセリ、然ラバ其他ノ痙攣毒ハ血液凝固如ニ血餅凝縮カニ對シ如何ナル作用ヲ有スルヤ、

由來痙攣毒ハ體溫竝ニ血液ニ對シー定ノ作用ヲ有スルモノノ如ク, 文獻ヲ涉纖スルニ,「ピクロトキシン」,「サントニン」,「コラミン」及ビ「ストリヒニン」等が體溫下降作用ヲ有スルコト (Harnack u. Meyer⁶),Hochheim⁷),Zutz⁸),高橋⁹),山内¹⁰),藤野¹¹)等),又諸種痙攣毒が血糖ニー定ノ影響ヲ及ボスコトヲ報告セルアリ(Rosenthal, Licht u. Lauterbach¹²),前坊¹³,飯島¹⁴)等),加之血液ノ Pェニ作用スト稱スルモノ (Watanabe¹⁵),Gyōrgi u. Vollmer¹⁶),柳井及ビ矢吹¹⁷)等)アリ.其他吉村¹⁸)ハ痙攣ニ關スル化學的檢索ヲ行ヒ,「ヘロイン」中毒ノ患者ニ就テ痙攣中ハ痙攣前ニ比シ血中残餘窒素,「クレアチン」,「クレアチニン」並ニ「アミノ」酸等ノ減少スルコトヲ證明セリ. 然ルニ他方ニ於テ血液ノ凝固性が證溫又ハ血液ノ Pェニー定ノ關係ヲ有スルコトハー般ニ認メラルル事質ニシテ,又最近血液ノ凝固性ト血糖トモー定ノ關係ヲ

有スト主張スルモノアリ (Partos u. Svec¹⁹⁾). 且又生體內 = 存在スル「グアニギン」誘導體モ血液ノ凝固機轉ニ對シー定ノ意義ヲ有スペキコトハ余²⁰⁾ ガ曩ニ發表セシ所ナリ. 然リト雖モ諸種痙攣毒ノ血液凝固ニ及ボス影響ニ就テハ前記物質ノ他文獻極メテ稀ニシテ,而モ吸收的作用トシテノ研究ニ至リテハ殆ド皆無ナリ.

核ニ於テ諸種痙攣毒が血液凝固及ビ血餅凝縮力ニ如何ナル作用ヲ呈スルヤ、上述ノ痙攣毒ノ種類ニョリ之等ノ作用ニモ區別アリヤ否ヤヲ研究センコトハ頗ル興味深キヲ覺ユルノミナラズ實地上ニ於テモ決シテ無意義ニ非ズト思惟シ、余ハ家兎ニ對シ痙攣ヲ起スベキ物質トシテ「ピクロトキシン」、「サントゾール」、「ストリヒニン」、「テバイン」、「コデイン」、「カフエイン」及ビ「アンチピリン」ヲ選ビ、之等物質ノ血液凝固並ニ血餅凝縮力ニ對スル作用ノ研究ヲ企テタリ、

實驗材料竝二方法

實驗動物 ハ總テ成熟家東ヲ使用シ、食餌ハ總テ豆腐粕ヲ以テシ、薬物ノ投與ハ皮下注射ヲ選ビタリ、而シテ血液凝固時間測定法へ田中²¹⁾ノ法ニ準據セルモノニシテ、血餅凝縮力測定法ハ余²²⁾ ガ曩ニ殺表セシモノヲ使用セリ

即チ使用器具ハ總テ充分清淨トナシ,直接加液ニ接觸スペキ部へ全部「バラフイヲ」塗布セリ.而シテ生體實驗ニ於テハ耳靜脉ヲ穿刺シテ滴下スル新鮮ナル血液ヲ使用シ、凝固時間ノ測定ニハ其約3滴量ヲ敏速ニ時計硝子ニ受ケ、直チニ其表面ヲ流動「バラフイン」ニテ包埋シ、定温装置(約23°C)ニ收ェ、繊細ナル鉤狀硝子ヲ以テ其血液ニ就キ凝固時間ノ第1期(最小凝固時間)及ビ第2期(最大凝固時間)ヲ測定セリ・又血餅凝縮力測定ニハ家兎ノ耳靜脈ヨリ新鮮ナル血液0.5 ∞ 宛ヲ一定ノ「ピペット」ニ探血シ、24 時間後ニ析出セル血清柱ト血餅柱トノ長サノ比ニヨリテ凝縮力ヲ測定セリ.

筒 本試験管内血液凝固測定法へ0.3% ノ蓚酸血液ヲ使用シ, 其0.5 cc = 1% 食鹽水0.5 cc ヲ加ヘタルモノニ被檢藥物ノ種セノ分量ヲ作用セシメ, 一定時間後5%ノ鹽化 ca 液ノ一定量ヲ加ヘ, 依ツテ起ル凝固迄ノ時間ヲ測定シ, 毎常藥液ニ代フルニ1%ノ食鹽水ヲ以テセル對照ト比較觀察セリ.

A. 生體ニ適用セル際其血液凝固時間ニ及ボス作用

1. 「ピクロトキシン」

家鬼體重1kg ニ對シ「ピクロトキシン」(第1表参照)0.1 mg ヲ皮下注射スレバ,血液ノ凝固性ハ殆ド變化セザルカ,又ハ僅ニ抑制セシメラル・而シテ 0.3 mg 以上ハ増量スルニ從ヒテ抑制作用增强シ、又作用持續時間モ延長ス・一般ニ本物質ノ凝固抑制作用ハ注射後 15 分ニテ現レ、30 分頃ニ於テ其作用最モ顯著ニシテ・約2時間後ニハ作用消失シ,正常凝固時間ニ恢復スルモノ多シ,而シテ少量ヨリ大量ニ至ル迄,凝固ノ第1期,第2期共ニ全然抑制作用ヲ呈シ,少シモ催進作用ヲ現サズ、2—2.5 mg ニテ痙攣ヲ起スニ至ルモ凝固時間ハ益々延長シ,正常凝固時間ノ 2—4 倍ニ達スルヲ觀ル・

實驗例	家兎體重 (kg) 及ビ性	藥物量	期別	血 注射後 注射前	液塔	凝 固 光 時	時 1 時	2 時	備考 一延長率
1	2,3	(mg) 0,1	第1期	2′	2′	2′	2/	2' 14'	
2	3.0	0,1	第2期	2′	14'	2/	13'	2' 13'	150/
3	3 2.2	0,3	第2期	2'	15' 2.'5	2.75	14'	2' 13'	-15% -25%
4	2.9	0.5	第2期	2'	15'	3' 16'	14' 2' 13'	2' 13'	- 7% -50% -23%
5	2.7	0,5	第2期	13' · 2' 12'	16′ 2′ 15′	3' 17'	2/ 13/	2' 12'	-50% -42%
6	2.3 8	1.0	第2期	2' 11'	2′ 13′	3' 14'	2.′5 13′	2' 12'	-50% -27%
7	2.4 Q	1.0	第2期 第1期 第2期	2′	3' 19'	2.75	3' 16'	2' 14'	-50% -36%
8	2,4 Q	2,0	第1期第2期	2. ′ 5	3' - 15'	4./5	5′ 16′	3' 14'	- 80% - 80% - 29% 痙攣ヲ起ス
9	2.5 8	2.5	第1期	2' 13'	5. ′ 5	8' 25'	2' · 24'	3' 17'	-300% - 92%痙攣ヲ起ス
	0		第2期	10		1 20	""	••	- 02/0

第1表 「ピクロトキシン」ノ血液凝固性ニ及ボス影響

即チ「ピクロトキシン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄 (0.1—2.5 mg), 専ラ血液ノ凝固性ニ抑制的ニ作用シ, 延長率ハ薬物量ト並行スルガ如シ.

2. 「サントゾール」(「サントニン」酸「ナトリウム」)

「サントゾール」(第2表参照) ハ家兎對 kg 0.01—0.1 g ヲ皮下注射スルモ, 血液ノ凝固性ニ對シ殆ド何等ノ作用ヲモ呈セザルカ, 或ハ僅ニ催進作用ヲ示ス、反之 0.2 g 以上ハ抑制作用ヲ來シ, 0.3 g ニテハ正常凝固時間ノ2倍ニ達セシモノアリ、然レドモ本物質ノ抑制作用ハー般ニ初期ニ於テ現レ, 注射後 15—30 分ニ於テ最モ顯著ニシテ, 其後却ツテ催進ニ移行スルモノアリ

		717	- 22			- 1111/1/2	MINISTE.	,,, · · · AD	
震験	家兎體重 (kg) 及ピ性	藥物量 (g)	期別	在 注射後 注射前	液	凝 固 % 時	時 1 時	間 2 時	備 考 十 短 縮 率 一 延 長 率
1	2.9 ô	0.01	第1期 第2期	2' 12'	2' 11'	2' 12'	2′ 12′	2' 12'	+ 8%
2	2.5 ô	0.05	第1期 第2期	3' 17'	2 ′ 17 ′	3' 17'	3' 17'	3 ′ 17 ′	+33%
3	1.9 8	0.05	第1期 第2期	3' 17'	3' 17'	3' 17'	3′ 17′	3 ′ 17′	
4	1.8 8	0.1	第1期 第2期	2./5 15'	2. ′ 5 15 ′	2. / 5 15 ′	2. ′ 5 15 ′	2./5 15′	

第 2 表 「サントゾール」ノ血液凝固性ニ及ポス影響

實	家兎體重	idate data assa	#41 /	ín	液	凝 固	時	間	備考 十短縮率
實驗例	(kg) 及ど性	藥物量 (g)	期	进 射和	74 時	½ 時	1 時	2 時	一
5	2.4 8	0.1	第13	3' 17'	3' 17'	2. ′ 5 16′	2. ′ 5 1 6′	3' 16'	+17% + 6%
6	2.4 ô	0.2	第15	2. ' 5 13'	2. ′ 5 13 ′	3' 16'	2. ′ 5 13′	2./5 13′	-20% -23%
7	3.4 ç	0.2	第15	3′ 13′	4. ′ 5 16′	2. ′ 5 13 ′	3' 13'	3 ′ 13 ′	—50% —23%
8	2.0 ô	0.3	第15	2.′5 13′	5 ′ 19 ′	2' 12'	1 ′ 9′	2. ′ 5 13 ′	-100%, +60% - 46%, +31%
9	3.0 P	0.3	第15	3' 3 15'	4.′5 18′	3' 15'	3' 15 '	3′ 15′	-50% -20%

即チ「サントゾール」ハ極メテ少量(0.01—0.1 g)ニテ僅ニ血液ノ凝固性ニ催進的ニ作用スルコトアレドモ、 又何等ノ作用ヲ呈セザルコトアリテ一定セズ・一定量以上(0.2—0.3 g)ニテハ著明ナル抑制作用ヲ現ス・然 レドモ此凝固抑制作用ハ「ピクロトキシン」ノモノニ比スレバ持續短シ・

3. 「ストリヒニン」

「ストリヒニン」(第3表参照) ハ家兎對 kg 0.01 mg ヲ皮下注射スルモ, 血液ノ凝固性ニ何等ノ變化ヲモ呈セズ. 0.05 mg 以上 0.2 mg 迄ハー般ニ凝固催進作用ヲ來ス・而シテ本物質ノ催進作用ハ注射後 15分ニ現レ,30分頃ニ於テ最モ顕著ニシテ正常凝固時間ノ約 ½ ニ達シ,其作用 2 時間以上持續スルモノ多シ・然レドモ著シク增量シテ 0.3 mg ニ達スレバ,初期ニ於テ却ツテ抑制作用ヲ現スモノアリ・尚ホ 0.5 mg ニテ痙攣ヲ起シ斃死スルニ至ル迄,凝固催進作用ヲ有スルヲ觀ル・

第3表 「ストリヒニン」ノ血液凝固性ニ及ボス影響

實驗例	家兎體重 (kg)	藥物量	期別	<u>ún</u>	液	凝 固	時	間	備考 十短縮率
例	及ピ性	(mg)		注射的	74 時	½ 時	1時	2時	一姓長年
1	2.7 ô	0.01	第1期 第2期	2' 13'	2 ′ 13 ′	2' 13'	2' 13'	2' 13'	
2	2.5 ô	0.05	第1期第2期	2' 12'	1. ′ 5 10 ′	1. ′ 5 10′	2 ' 12 '	2' 12'	+25% +17%
3	2.4 ô	0.05	第1期 第2期	2' 14'	2 ′ 10 ′	1' 8'	2 ′ 14 ′	2′ 13′	+50% +43%
4	2.5 ô	0.1	第1期 第2期	2.′5 17′	2 ′ 15 ′	1./5 12 ′	2' 13'	2. ′ 5 1 4′	+40% +29%
5	2.6 8	0.1	第1期 第2期	2' 15'	1. / 5 15 /	1' . 10' .	2 ′ 12 ′	2′ 13′	+50% +33%
6	2,2 ô	0.2	第1期 第2期	2' 14'	2' 14'	2' 12'	1. ′ 5 12 ′	2' 14'	+25% +14%
7	2.9 8	0,3	第1期 第2期	2' 12'	3. ′ 5 17 ′	2. ′ 5 15 ′	1. ′ 5 10 ′	2′ 13′	-75%, +25% -42%, +17%
8	2.4 8	0.5	第1期 第2期	2' 15'	2′ 11′	烈シキ ヲ起 :			+27%

即チ『ストリヒニン」へ少量ヨリ大量(0.05-0.5 mg)=至ル迄、専ラ血液ノ凝固性=催進的=作用ス、然レドモ大量(0.3 mg)=テハ初期=於テ却ッテ抑制作用ヲ現シ、次デ催進作用ヲ呈スルモノアリ。

4. 「コデイン」

燐酸「コデイン」(第4 表参照) ハ家兎對 kg 0.001 g ヲ皮下注射スルモ、血液ノ凝固性=對シ何等ノ變化ヲモ呈セザレドモ、0.005 g ニテハ僅=催進作用ヲ現シ、増量シテ 0.03 g ニ至ル迄一般ニ催進的ニ作用ス・而シテ其作用ハ注射後 15 分乃至 2 時間ニ於テ現レ、殊ニ初期ニ於テ顯著ナリ・然レドモ更ニ増量シテ 0.04 g ニ達スレバ、何等催進作用ヲ呈セザルノミナラズ、却ツテ著シキ抑制作用ヲ來スヲ觀ル・

實	家兎體重	※ 伽鲁	期別	ún	液	凝 固	時	間	備考十短縮率
實驗例	(kg) 及ビ性	藥物量 (g)	75 51	往射後 注射前	¼ 時	½ 時	1 時	2 時	備考十短縮率一延長率
1	2.7 8	0.001	第1期 第2期	2' 14'	2′ 14′	2' 14'	2' 14'	2′ 14′	
2	2.7 8	0.005	第1期 第2期	2' 13'	2′ 13′	1. ′ 5 13 ′	2 ′ 13 ′	2 ′ 13 ′	+25%
3	3.3 გ	0.005	第1期 第2期	2' 13'	1. ′ 5 13 ′	1./5 13/	2 ′ 13 ′	2' 13'	+25%
4	2.3 8	0.01	第1期 第2期	2. ′ 5 15 ′	1 ' 12 '	2' 14'	1 ′ .5 12 ′	2′ 15′	+60% +20%
5	2. 3 გ	0.01	第1期 第2期	2. ′ 5 15 ′	1' 11'	1.′5 12′	2.′5 15 ′	2, ′ 5 13 ′	+60% +27%
6	2,5 ♀	0.02	第1期 第2期	2' 13'	1./5 11 ′	2' 13'	2 ′ 13 ′	2′ 13′	+25% +15%
7	2.3 ô	0.03	第1期 第2期	2' 14'	1' 10'	1.⁄5 10′	2' 12'	2' 12'	+50% +29%
8	2.4 ç	0.04	第1期 第2期	2' 14'	7 ′ 20 ′	3' 14'	4. ′ 5 19 ′	2' 14'	-250% - 43%

第 4 表 燐酸「コデイン」ノ血液凝固性ニ及ボス影響

即チ「コデイン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄(0.005—0.03 g), 一般ニ血液凝固催進作用ヲ呈ス. 然レドモ著シク大量ニ違スレバ(0.04 g) 却ツテ抑制的ニ作用ス.

5. 「テバイン」

「テバイン」(第5表参照) ハ家兎對 kg 0.5 mg ヲ皮下注射スルモ, 血液ノ凝固性ニ對シ何等ノ作用ヲモ星セズ. 1 mg 以上ニテハ一般ニ初期ニ於テ催進作用ヲ現スモノ多シト雖モ, 總テ後ニハ抑制作用ヲ呈ス. 而シテ催進作用ハ注射後 15 分ニ於テ現レ, 抑制作用ハ 30 分頃ニ顯著ナレドモ, 屢々初メヨリ抑制的ニ作用スルモノアリ. 又増量スルニツレ抑制作用署明ニシテ正常凝固時間ノ約 2 倍ニ達セシモノアリ.

實	家兎體重	-Mr.44. PD	#57 554	Ín	液	凝 固	時	間	備考 + 短縮率 一延長率
實驗例	(kg) 及ビ性	薬物量 (g)	期別	在射前 注射前	¼ 時	½ 時	1 時	2 時	一
1	3.3 8	0.0005	第1期第2期	2' 14'	2' 14'	2' 14'	2' 14'	2' 14'	
2	2.7 8	0.001	第1期 第2期	2' 12'	2' 10'	3′ 13′	2. ′ 5 13 ′	2' 10'	-50% +17%, - 8%
3	2.3 Q	0.001	第1期 第2期	2' 14'	2 ' 20 '	3' 14'	3' 14'	3' 14'	-50% -43%
4	2.5 8	0.002	第1期 第2期	2' 14'	1. / 5 12 /	2. ′ 5 18 ′	2. ′ 5 17 ′	2 ′ 15′	+25%, -25% +14%, -29%
5	2.3 8	0.003	第1期 第2期	2′ 14′	1. ′ 5 10 ′	5' 15'	2′ 1 4′	3′ 14′	+25%, -150% +29%, - 7%
6	2.1 8	0.005	第1期 第2期	2' 14'	3 ′ 17 ′	3./5 17/	2. ′ 5 17 ′	2' 16'	−75% −21%
7	2.1 ç	0.005	第1期 第2期	2' 16'	1. ′ õ 15 ′	2. ′ 5 17′	1. / 5 15 /	2. ′ 5 17 ′	+25%, -25% + 6%, - 6%
8	2.3	0.01	第1期 第2期	2' 13'	2 ′ 15′	2' 15'	3 ′ 22 ′	2/ 15/	-50% -69%

第 5 表 「テバイン」ノ血液凝固性ニ及ボス影響

即 チ 「テ バイン」ハ少量 ョリ大量 ニ至ル迄 (0.001—0.01 g), 血液凝固抑制作用 ョ 有 ス. 然レドモー般 ニ 初期 ニ 於テ催進作用 ヲ 呈 ス.

6. 「カフエイン」

安息香酸「ナトリウムカフエイン」(第6 表参照) ハ家兎對 kg 0.005 g ヲ皮下注射スルモ, 血液ノ凝固性ニ對シ何等ノ變化ヲ呈セズ. 0.01 g 以上 0.1 g 迄ハ一般ニ初期ニ於テ凝固性ヲ催進シ, 後抑制ニ移行スルヲ常トス. 而シテ催進作用ハ注射後 15 分ニ於テ現レ, 抑制作用ハ 30 分後ニ發現シ, 薬物ヲ増量スルニツレ抑制作用増强シ, 0.1 g 以上ニ達スレバ正常凝固時間ニ比シ約 2 倍ノ凝固時間ヲ要スルニ至ル.

	7,7	~	76.00	• • • •		_	, <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , , </u>		
實驗例	家兎體重 (kg)	藥物量	期別	血生射後	液	凝 固	時	間	備考 十短縮率
<u>191</u>	及ビ性	(g)		往射前	¼ 時	½ 時	1 時	2 時	
1	3.1 ô	0.005	第1期 第2期	2./5 15'	2. ′ 5 15 ′	2./5 15/	2. ′ 5 15 ′	2. / 5 15 /	
2	2.4 ♀	0.01	第1期 第2期	2' 15'	1. ′ 5 13 ′	2. ′ 5 17 ′	2. ′ 5 1 7′	2′ 14′	+25%, -25% +13%, -13%
3	2.3 8	0.01	第1期 第2期	3' 17'	2. ′ 5 16 ′	4' 20'	3' 17'	3 ′ 1 7′	+17%, -33% + 6%, -18%
4	2.2 ô	0.03	第1期 第2期	. 2. ′ 5	2 ′ 17 ′	3 ′ 20 ′	2 ′ .5 17 ′	2 ′ 15 ′	+20%, -40% -18%
5	2.1 P	0.05	第1期 第2期	2./5 15'	2′ 13′	4' 16'	3′ 15 ′	2. ′ 5 1 4′	+20%, -60% +13%, - 7%
6	2.7 ô	0.05	第1期 第2期	2' 15'	2 ′ 15 ′	2' 13'	2. ′ 5. 18 ′	2' 15'	-25% +13%, -20%
7	2,2 ♀	0.1	第1期 第2期	2./5 17'	2' 14'	3./5 24/	2. ′ 5 16 ′	2.′5 17′	+20%, -40% +18%, -41%
8	2.3 ô	0.1	第1期 第2期	2' 12'	3 ′ 20 ′	2/ 14/	2/ 12/	2' 12'	-50% -67%
9	3.0 \$	0.2	第1期 第2期	2' 13'	2' 16'	4.′5 25′	3. ′ 5 19 ′	2' 15'	-125% 2日後斃死

第6表 安息香酸[ナトリウムカフエイン]ノ血液凝固性ニ及ボス影響

即チ安息香酸「ナトリウムカフエイン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄(0.01—0.1 g), 血液ノ凝固性ニ對シー般ニ初期催進後抑制セシメ、增量スルニ從ヒ抑制作用增强シ、著シキ大量(0.1 g 以上)ニ達スレバ初メヨリ抑制的ニ作用ス.

7. 「アンチピリン」

Henocque²⁸⁾ 及ビ Huchard²⁴⁾ ガ「アンチビリン」 / 止血作用ヲ唱道セシ以來,臨牀醫家ニハ之ヲ有效ナル止血薬トシテ稱揚スルモノ少カラズ、然レドモ尾崎²⁶⁾ ハ血液ニ對スル直接作用並ニ血管作用等ヲ研究シ,該薬ハ止血作用ヲ有セザルノミナラズ, 却ソテ出血ヲ催進スト主張セリ.

余ノ實験ニ於テハ「アンチピリン」(第7表参照) ハ家兎對 kg 0.05—0.2 g ヲ皮下注射スレバ,血液ノ凝固性ニ對シ殆ド作用ヲ呈セザルカ,或ハ僅ニ催進的ニ作用シ,又ハ初期催進後抑制ニ移行セリ.然レドモ 0.3 g 以上ニ達スレバ著明ナル抑制作用ヲ現シ,0.5 g ニ於テ其作用最モ顯著ニシテ正常凝固時間ノ 2—3 倍ノ凝固時間ヲ要スルニ至ル.向ホ増量シテ 1 g ニテ痙攣ヲ起スニ至ル迄全然抑制的ニ作用ス.而シテ其抑制作用ハ往射後 15 分乃至 30 分ニテ現レ,2 時間以上持續スルモノ多シ.

實	家兎體重	780 May 124	#12 134	th	液	凝 固	時	間	_{雌 多} 十 短 縮 率
實驗例	(kg) 及ビ性	藥物量 (g)	期別	往射後 往射前	74 時	½ 時	1 時	2 時	備考 十短縮率
1	2.8 ô	0.05	第1期 第2期	2' 13'	2 ′ 13 ′	1./5 12/	2 ′ 13 ′	2 ′ 13 ′	+25% + 8%
2	2.7 8	0.1	第1期 第2期	2' 13'	2 ′ 13 ′	2' 12'	2' 12'	2′ 13′	+ 8%
3	2.7 8	0.1	第1期 第2期	2' 12'	3′ 13′	1. ′ 5 12⁄	4. ′ 5 16 ′	2 ′ 12 ′	+25%, -125% -33%
4	2.4 ô	0.2	第1期 第2期	2' 12'	2 ′ 10 ′	2' 10'	2' 10'	2′ 11′	+17%
5	2.7 8	0.3	第1期 第2期	2' 12'	2′ 11′	2' 13'	5 ′ 19 ′	3. ′ 5 15 ′	-150% - 58%
6	2.4 8	0.5	第1期 第2期	2' 12'	3 ′ 24 ′	2./5 19′	3' 17'	2./5 15/	- 50% -100%
7	2.3 8	0.5	第1期 第2期	2' 12'	6 ′ 27 ′	5. ′ 5 22 ′	6 ′ 18 ′	5 ′ 16 ′	-200% -125%
8	2.4 8	1.0	第1期 第2期	2' 10'	2. ′ 5 13 ′	2. ′ 5 15 ′	2′ 12′	2 ′ 10 ′	-25% 痙攣ヲ起ス -50%

第 7 表 「アンチピリン」ノ血液凝固性ニ及ボス影響

即チ「アンチピリン」ハ少量 (0.05—0.2g) ニテハ血液ノ凝固性ヲ僅ニ催進スルモノアレドモ,中等量以上 (0.3—1g) ハ著シキ抑制作用ヲ呈ス。

上記諸種痙攣毒,血液凝固性ニ及ボス影響ヲ觀察スルニ、「ピクロトキシン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄専ラ抑制的ニ作用シ、「サントゾール」モ少量ニテハ何等ノ作用ヲモ呈セザルカ、又ハ僅ニ催進スルコトアレドモ、一定量以上(0.2—0.3 g)ニテハ常ニ著明ナル抑制作用ヲ現ス、之ニ反シ「ストリヒニン」及ビ「コデイン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄專ラ催進的ニ作用シ、甚ダ大量ニテ却ツテ抑制作用ヲモ現スニ至ル・「テバイン」及

ピ「カフエイン」ハ一般ニ初期催進後抑制ニ作用スルヲ常トシ,大量ニテハ主トシテ抑制的ニ作用ス.「アンチビリン」ハ少量ニテハ僅ニ催進作用ヲ有スレドモ,中等量以上ハ著シキ抑制作用ヲ呈ス.

由是觀之,血液凝固性ニ對スル作用ヨリ痙攣毒ヲ次ノ如ク分類スルコトヲ得. 卽チ主トシテ凝固抑制的ニ作用スルモノハ「ピクロトキシン」及ピ「サントニン」ニシテ,「ストリヒニン」及ピ「コデイン」、ハ主トシテ催進的ニ作用シ,「テバイン」、「カフェイン」及ピ「アンチビリン」、小兩者ノ中間ノ作用型ヲ有シ、少量又ハ作用ノ初メニハ「ストリヒニン」等ノ如ク作用ス.

B 生體ニ適用セル際其血餅凝縮カニ及ボス作用

前記度験ニ據リテ諸種痙攣毒ハ夫×血液ノ凝固性ニ一定ノ影響ヲ及ポスコトヲ知レリ・然ルニ諸種藥物ノ血液凝固性ニ對スル作用ト血餅凝縮力ニ對スル作用ハ一定度迄一致スルモノナレドモ、亦腹×相反スル場合モ存スルコトハ余^{22) 5)} ガ爨ニ報告セシ實験成績ニヨリテ明カナリ、茲ニ於テ更ニ前記諸物質ニ就キ夫等ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響ヲ檢シ、夫等ノ血液凝固時間ニ對スル作用ト比較観察セリ・

1. 「ピクロトキシン」

「ピクロトキシン」(第8表参照) ハ家兎體重 1 kg ニ動シ 0.1 mg ヲ皮下注射スレバ、明カニ血餅ノ凝縮力ヲ抑制ス、而シテ一般ニ增量スルニ從ヒ其作用增强シ、持續時間モ延長ス. 向ホ 3 mg ニテ痙攣ヲ起シ斃死スルニ至ル迄全然抑制的ニ作用ス. 而シテ本抑制作用ハ注射後 15 分ニテ現レ、少量ニテハ 30 分乃至 1 時間、大量ニテハ 2 時間以上持載スルモノ多シ.

例	家兎體重 (kg)	蒸		ún	餅	凝	縮	カ	備考一減少率
	及ビ性	藥物量 (mg)		注射後 注射前	择時	½ 時	1 時	2 時	服号 - 概少平
1	2.7 ô	0.1	血 清 無 餅 凝縮力	15 35 42.9	13 37 35.1	12 38 31.6	13 37 35.1	15 35 42.9	-26%
2	3.2 ô	0.1	血清 所 餅 凝縮力	12 38 31.6	$\begin{array}{c} 8 \\ 42 \\ 19.0 \end{array}$	8 42 19.0	8 42 19.0	12 38 31.6	-39%
3	2.7 8	0.3	血 清加 餅 凝縮力	10 40 25.0	6 44 13.6	10 40 25,0	10 40 25.0	11 39 28.2	-46%
4	2.6 3	0.5	血 清加 餅 凝縮力	15 35 42.9	12 38 31.6	13 37 35,1	12 38 31.6	15 35 42.9	- 26%
5	3.1 ô	0.5	血 清加 餅 凝縮力	18 32 56.3	14 36 38.9	15 35 42.9	. 14 36 38.9	17 33 51.5	-31%
6	2.9 P	1.0	如 清 加 餅 凝縮力	15 35 42.9	11 39 28.2	12 38 31.6	14 36 38.9	14 36 38.9	- 34%
7	1.9 8	1.0	血 満 血 餅 凝縮力	17 33 51.5	15 35 42.9	11 39 28.2	11 39 28.2	12 37 31.6	-45%

第8表 「ピクロトキシン」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

例	家兎體重 (kg)	藥物量		fin .	餅	凝	縮	力	備考。一減少率
ניס	及ビ性	₩₩ (g)		注射锁 注射前	74 時	½ 時	1 時	2 時	加 写。一 概 夕 平
8	2.1 8	1.5	血 清 때 餅 凝縮力	13 37 35,1	6 44 13.6	12 38 31.6	8 42 19,0	10 40 25.0	-61%
9	2,5 8	2.0	血 清 加 餅 凝縮力	14 36 38.9	13 37 35.1	12 38 31.6	6 41 13.6	16 34 47,1	-65%
10	2.1 8	3.0	血 清	10 40 25.0	5 4 5 11.1	8 42 19.0	痙攣ヲ起 シ斃死		-56%

即 チ 「ピクロトキシン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄、全然血餅ノ凝縮力ヲ抑制シ、其作用恰モ本物質ノ血液凝 固抑制作用ニ一致セリ・

2. 「サントゾール」

「サントゾール」(第9表参照) ハ家兎對 kg 0.01 g ヲ皮下注射スレバ, 血餅凝縮力ニ對シ何等ノ作用ヲ呈セザルカ, 又ハ催進的ニ作用ス, 0.05 g ニテハ初期一過性ノ催進後抑制シ, 又ハ初メヨリ抑制的ニ作用ス, 順次増量シ0.3 g ニ至ル迄一般ニ凝縮力ヲ抑制ス, 而シテ本物質ノ抑制作用ハ注射後 15 分ニテ現レ, 2 時間以上持續スルモノ多シ, 但シ稀ニ初期ニ於テ僅ニ催進作用ヲ現セシモノアリ,

第 9 表 「サントゾール」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

2°-1-1									
例	家兎體重 (kg) 及ビ性	藥物量		在 建射後 注射前	餅 ¼ 時	凝 時	縮 1 時	カ 2 時	備考 +增加率
	2.2 Q	(g) 0.01	血 清 血 餅 凝縮力	13 37 35.1	13 37 35.1	15 35 42.9	13 37 35,1	13 37 35,1	+22%
	3,0	0,05	和 清	20 30 66.7	22 28 78.6	16 34 47.1	18 32 56.3	16 34 47.1	+18%, -29%
3	2.6 8	0.05	血清侧侧折	18 32 56.3	17 33 51.5	15 35 42,9	15 35 42,9	15 35 42.9	— 28 %
4	2,5 8	0.1	和 清 加 餅 凝縮力	13 37 35.1	12 38 21.6	12 38 31.6	12 38 31.6	14 36 38,9	-10%
5	2.7 8	0.1	加 清 加 餅 凝縮力	13 37 35.1	11 39 28.2	11 39 28.2	12 38 31,6	12 38 31.6	-20%
6	2. 3 ♀	0.2	加 清 血 餅 凝縮力	14 36 38.9	15 35 42,9	14 36 38.9	13 37 35.1	13 37 35.1	+10%,10%
7	2.4 8	0.2	加 清 加 餅 凝縮力	16 34 47.1	13 37 35,1	14 36 38.9	14 36 38.9	15 35 42,9	-25%
8	2.0 8	0.3	血清 血 餅 妖縮力	20 30 66.7	17 33 51.5	14 36 38.9	15 35 42.9	15 35 42.9	-42%

即チ「サントゾール」ハ血液凝固試験ニ於テ観タルガ如ク、血餅凝縮力ニ對シテモ催進、抑制ノ兩作用ヲ有 スレドモ、催進作用ハ毎常ナラズ、又初期ー過性ニ微弱ニ現ルノミニシテ、一定量以上ハ主トシテ抑制的ニ 作用ス.

3. 「ストリヒニン」

「ストリヒニン」(第 10 表参照) ハ家兎對 kg 0.01 mg ヲ皮下注射スレバ, 血餅凝縮力ヲ僅ニ催進シ, 順次 增量シテ 0.1 mg ニ至ル迄, 一般ニ催進的ニ作用ス. 而シテ本物質ノ催進作用ハ注射後 15 分乃至 30 分ニ現 レ, 1-2 時間持續スレドモ、増量スルニツレ催進後抑制ニ移行シ, 0.2—0.3 mg ニ達スレバ却ツテ抑制作用 ノ方著明ニ發現スルニ至ル. 但シ 0.5 mg ニテ痙攣ヲ起シ斃死スルニ至ルモ凝縮力ノ催進作用ヲ有ス.

	家兎體重 (kg)	薬物量		án	餅	凝	縮	カ	備考 一減少率
	及ビ性	来加里 (mg)		注射後	%時	½ 時	1時	2 時	一
1	2.8	0,01	血 清 血 餅 凝縮力	13 37 35.1	12 38 31.6	14 36 38.9	13 37 35,1	13 37 35,1	+11%
2	2.9 8	0.05	血 清 脈 が が が が が が が が が が が が が が が が が が	8 42 19.0	10 40 25.0	9 41 21.9	10 40 25.0	8 42 19.0	+32%
3	2.8 8	0.05	血 清 血 餅 凝縮力	8 42 19.0	12 38 31.6	11 39 28.2	12 38 31.6	9 41 21.9	+66%
4	2.4 8	0.1	血 清 脈 餅 凝縮力	12 38 31.6	14 37 37.8	14 36 38.9	11 39 28.2	10 40 25,0	+23%
5	2.8	0.1	和 清	10 40 25.0	12 38 31.6	11 39 28.2	8 42 19.0	10 40 25.0	+26%
6	2.3 8	0.2	血 清 血 餅 凝縮力	16 34 47.1	15 35 42.9	15 35 42.9	16 3‡ 47.1	13 37 35 .1	-25%
7	2.2 8	0.3	血清血清 無難 無難 無難 無難 無難 無難 無難 無難 無力	9 41 21.9	5 45 11.1	9 41 21.9	12 38 31.6	9 41 21.9	-49%, +44%
8	2.1 8	0.5	血清血精纤维指力	10 40 25.0	12 38 31.6	烈シキ	痙攣ヲ起	シ斃死	+26%

第 10 表 「ストリヒニン」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

即チ「ストリヒニン」ハ少量ヨリ大量ニ至ル迄、血餅凝縮力ニ對シ催進的ニ作用ス. 然レドモ大量ニ於テハ 抑制作用ヲモ現ス. 之等ノ作用へ血液凝固ニ對スル作用ニ略ポー致セリ.

4. 「コデイン」

燐酸「コデイン」(第11表参照) 八家兎對 kg 0.001 g ヲ皮下注射スレバ, 僅ニ血餅ノ凝縮力ヲ催進ス. 順次

増量シテ 0.01 g = 至ル迄ハ專ラ催進的 = 作用ス・ 而シテ本物質ノ催進作用ハ注射後 15—30 分 = 現レ, 1—2 時間持續ス. 然レドモ 0.02 g = テハ催進後抑制 = 移行シ, 0.04 g = 達スレパ却ツテ初期 = 於テ抑制作用ヲ現セリ.

	[<u>-</u>								
例	家兎體重 (kg)	藥物量		ÍII Na sa sa	餅	凝	縮	b	備考 +增加率
	及ビ性	(g)		注射 健 注射前	74 時	½ 時	1 時	2時	— W —
1	2.7 8	0.001	血 清加 餅 凝縮力	19 31 61,3	20 30 66.7	19 31 61.3	19 31 61,3	19 31 61.3	+ 9%
2	2.7 8	0,005	血清加料	14 36 38.9	14 36 38.9	15 35 42,9	14 36 38,9	14 36 38.9	+10%
3	3,3 8	0,005	血 清 飢 餅 凝縮力	15 35 42.9	18 32 56,3	15 35 42,9	15 35 42,9	15 35 42,9	+31%
4	2,5 8	0.01	血 清 血 餅 凝縮力	15 35 42,9	15 35 42.9	20 30 66.7	16 34 47.1	16 34 47.1	+55%
5	2.3 ô	0.01	血 清 加 餅 凝縮力	14 36 38.9	15 35 42.9	14 36 38.9	15 35 42.9	14 36 38,9	+10%
6	2.5 ♀	0.02	血清加新級縮力	19 31 61.3	20 30 66.7	19 31 61.3	15 35 42,9	19 31 61.3	+ 9%, -30%
7	2.3 ô	0,03	血 清 血 餅 凝縮力	14 36 38.9	15 35 42.9	15 35 42,9	14 36 38.9	14 36 38.9	+10%
8	2.4 9	0.04	血清血精	14 36 38.9	12 38 31.6	13 37 35.1	15 35 42.9	16 34 47.1	-19% , +21%

第 11 表 燐酸「コデイン」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

即 チ「コデイン」ハ血餅凝縮力ニ對シテモ血液凝固ニ於ケルガ如ク, 少蔵ヨリ大量ニ至ル迄、一般ニ催進作用ヲ有ス. 然レドモ大量ニ違スレバ抑制作用ヲモ現ス.

5. 「テ バ イ ン」

「テバイン」(第 12 表参照) ハ家鬼對 kg 0.5 mg ヲ皮下注射スルモ, 血餅凝縮力ニ對シ何等ノ變化ヲモ星セズ. 1—5 mg ニテハー般ニ凝縮力ヲ抑制ス. 而シテ本物質ノ抑制作用ハ主トシテ注射後 15 分ヨリ現レ, 2 時間以上持續スルモノ多シ 然レドモ 0.01 g ノ如ク痙攣ヲ起ス致死量ニ至レバ却ツテ凝縮力ヲ初期催進後抑制セシメタリ.

例	家鬼體重 (kg)	被 他 自		f n	餅	凝	縮	カ	備考十增加率
	及ピ性	藥物量 (g)		往射鏡 注射前	¼ 時	½ 時	1時	2 時	備考一減少率
1	2.6 ô	0.0005	血清血餅	14 36 38.9	14 36 38.9	14 36 38.9	14 36 38.9	14 36 38.9	
2	2.1 8	0,001	血 清 血 餅 凝縮力	11 39 28.2	11 39 28.2	8 42 1 9.0	9 14 21.9	10 40 25.0	— 33%
3	2,3 8	0.001	血 清 血 餅 凝縮力	16 34 47.1	14 36 38.9	14 36 38.9	13 37 35.1	14 36 38.9	25%
4	2.5 ô	0.002	血 清 血 餅 凝縮力	22 28 78.6	19 31 61.3	19 31 61.3	20 30 66.7	21 29 72.4	— 22%
5	2,3 8	0.003	血 清 血 餅 凝縮力	25 25 100.0	21 29 72.4	18 32 56.3	21 29 72.4	21 29 72.4	-44%
6	2.1 9	0.005	血 清 血 餅 凝凝力	16 34 47.1	13 37 35,1	12 38 31.6	12 38 31.6	15 35 42.9	- 33%
7	2.5 ô	0.005	血 清 血 餅 凝縮力	17 33 51.5	15 35 42.9	16 34 47.1	17 33 51.5	16 34 47.1	-17%
8	2.2 9	0.01	血 清 血 餅 凝縮力	15 35 42.9	18 32 56.3	13 37 35.1	烈シキ	痙攣ヲ 死	+31%, -18%

第 12 表 「テバイン」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

即チ「テパイン」へ血餅機縮力ニ對シテハ少量ヨリ大量ニ至ル迄、一般ニ抑制的ニ作用ス. 但シ著シキ大量ニ至レバ催進作用ヲモ現ス. 本物質ニ於テハ血液凝固ニ對スヲ作用ト血餅凝縮力ニ對スル作用ハ一致セザルガ如シ.

6. 「カフエイン」

安息香酸「ナトリウムカフエイン」(第 13 表参照) 八家恵對 kg 0.005 g ヲ皮下注射スルモ,血餅凝縮力ニ 對シテ何等ノ作用ヲモ呈セズ・0.01 g ニ至レバ僅ニ凝縮力ヲ抑制ス・而シテー般ニ増量ト共ニ其作用増强シ, 0.2 g ニテ斃死スルニ至ル迄,全然抑制的ニ作用ス・而シテ本物質ノ抑制作用へ主トシテ注射後 15 分ニ現レ, 1—2 時間持續ス・

	<i>≯</i> ₽ <u>.</u>	· 3X	女心 日	12017 「	, , T W	/ _ 1 /	、】、mrfi	/「妖術 ル	一尺小人形容
例	家兎體重 (kg) 及ビ性	藥物量	-	血 连射後 生射剂	餅	凝 ½ 時	縮1時	カ 2 時	備考 十增加率 一 一
1	2.3	(g) 0,005	血餅血精	9 41 21.9	9 41 21.9	9 41 21.9	9 41 21.9	9 41 21.9	
Ź	3.0 8	0.01	血 餅血 清 凝縮力	14 36 38.9	13 37 35.1	14 36 38.9	14 36 38.9	15 35 42.9	-10%
3	2.4 P	0.01	血 餅 血 清 凝縮力	14 36 38.9	14 36 38.9	12 38 31.6	13 37 35.1	14 36 38.9	-19%
4	2.0 8	0.03	血 併 血 清 凝縮力	14 36 38.9	12 38 31.6	11 39 28.2	16 34 47.1	15 35 42.9	-28%
5	2.3 P	0.05	血餅血清	13 37 35.1	12 38 31.6	13 37 35,1	13 37 35.1	13 37 35,1	-10%
6	2.5 8	0.05	血餅血清凝縮力	15 35 42.9	14 35 40.0	14 36 38.9	14 36 38.9	15 35 42.9	– 9%
7	2.5 9	0.1	血 餅 血 清 凝縮力	18 32 56.3	16 34 47.1	14 36 38.9	15 36 41.7	19 33 57.6	- 31%
8	2.3 P	0.1	血 餅 血 清 凝縮力	13 37 35.1	12 38 31.6	10 40 25.0	12 38 31.6	12 38 31.6	— 29%
9	3.0 ô	0.2	血 併加 清縣	15 35 42.9	5 47 10.6	10 40 25.0	8 43 18.6	14 37 37.8	2 日後斃死 75%

第 13 表 安息香酸[ナトリウムカフエイン]ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

即チ安息香酸「ナトリウムカフエイン」ハ少量ョリ大量=至ル迄, 血餅機縮力=對シ專ラ抑制的=作用ス・本物質=於テモ血液凝固=對スル作用ト血餅凝縮力=對スル作用トハー致セズ.

7. 「アンチピリン」

「アンチピリン」(第 ¹⁴ 表参照)ハ家兎對 ^{kg} 0.05 g ヲ皮下社射スルモ、血餅凝縮力=對シ何等!作用ヲモ 呈セズ、0.1 g ニテハ凝縮力ヲ僅ニ抑制シ、又ハ抑制後催進作用ヲ呈ス・夫レヨリ順次增量シテ 0.5 g ニ至ル 迄一般ニ催進作用ヲ有ス・然レドモ 0.5 g ニ於テハ催進後抑制ニ移行シ、尚ホ 1 g ニテ痙攣ヲ起スニ至ルモ 其作用顕著ナラズ、僅ニ抑制作用ヲ現セシノミナリ、

例	家鬼體電	蒸 栅 昌		m	餅	凝	縮	カ	備考 +增加率
<i>[</i> 79	(kg) 及ビ性	藥物量 (g)		注射後 注射剂	¼ 時	1½ 時	1 時	2 時	一减少率
	2.8	0.05	加清	13	13	13	13	13	
1	ð	0.05	血 餅 凝縮力	37 35.1	37 35.1	37 35.1	37 35.1	37 35.1	
	2.7		血清	15	15	15	18	15 .	
2	8	0.1	血 餅 凝縮力	35 42.9	$\frac{36}{41.7}$	37 40.5	32 56.3	35 42.9	- 6%, +31%
	2.7		血 清	16	14	14	15	16	
3	8	0.1	血 餅 凝縮力	34 47.1	36 47.1	36 47.1	35 42.9	34 47.1	– 9%
			血清	15	15	17	15	15	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
4	2.4 ô	0.2	血 餅	35	35 42,9	33 51.5	35 42.9	35	1 20-1
			凝縮力	42.9				42.9	+20%
5	2.7 ô	0.3	血清血餅	14 36	14 36	15 35	16 34	14 36	
			凝縮力	38.9	38.9	42.9	47.1	38.9	+21%
6	2.4	0.5	血清血	16 34	18 32	15 35	15 35	16 34	
Ū	ð		凝縮力	47.1	56.3	42.9	42.9	47.1	+20%, - 9%
-	2.3	0.5	血清	15 35	17	13 37	15	15	
7	ô .	0.0	血餅	42.9	33 51.5	35.1	35 42.9	35 42.9	+20%, -18%
	2.4		血清	15	14	15	15	15	
8	ô	1.0	血 餅 凝縮力	35 42.9	36 38.9	35 42.9	35 42.9	35 42.9	痙攣ヲ起ス ー 9%

第 14 表 「アンチピリン」ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響

即チ本物質へ血餅凝縮力ニ對シテハ其作用顯著ナラス,少量並ニ大量ニ於テ僅ニ抑制作用ヲ現セドモ,中等量ニ於テハ一般ニ催進的ニ作用ス.

上記諸種痙攣毒ノ血餅凝縮力ニ及ボス影響ヲ観察スルニ,「ピクロトキシン」ハ凝縮力ヲ全然抑制シ,「サントゾール」モ主トシテ抑制的ニ作用シ,「ストリヒニン」及ピ「コデイン」ハ主トシテ催進的ニ作用ス. 之等ノ作用ハ恰モ之等物質ノ血液凝固性ニ對スル作用ニ略ボ一致スレドモ, 反之「テバイン」及ピ「カフエイン」ガー般ニ血餅凝縮力ヲ抑制シ, 又「アンチピリン」ノ凝縮力ニ對スル作用顯著ナラザルノミナラズ, 催進作用ガ抑制作用ニ勝レルコト等ハ血液凝固ニ對スル作用ト一致セザルガ如シ.

本成績ヲ先ノ血液凝固時間ニ對スル作用型ト比較スルニ、血餅凝縮力ニ對スル作用ニ於テモ「ピクロトキ シン」及ピ[「]サントニン」ト「ストリヒニン」及ビ「コデイン」が作用型ヲ異ニシ、前者ハ主トシテ抑制的ニ、後 者ハ主トシテ催進的ニ作用スルハ殆ド全ク一致スル所ナレドモ、他ノ三者ハ少シク異リ、此場合「テバイン」 及ピ「カフエイン」ハ寧ロ「ピクロトキシン」=近キ作用型ヲ示シ. 唯「アンチピリン」ノミ兩者ノ中間位ニ止マル.

C. 試驗管內實驗

生體ニ於テ 諸種痙攣毒 ガ血液凝固性 並ニ 血餅凝縮力ニ對シー定ノ作用ヲ呈スルコトハ既ニ述ベタルガ如シ・然ラパ 試験管内實験ニ於テ之等物質ハ直接血液ニ對シテ如何ナル影響ヲ及ボスカ前述ノ如ク 尾崎ハ血液ニ直接作用セシメテ大量ノ「アンチピリン」ガ凝固抑制作用ヲ有スルコトヲ證明セリ・然レドモ其他ノ物質ニ就テハ未ダ文獻ヲ見出スヲ得ズ・茲ニ於テ 前記諸物質ヲ直接血液ニ作用セシメテ 其凝固機轉ニ及ボス作用ヲ檢査セリ・

既述/實験方法=從と諸種痙鬱毒ヲ蓚酸血液=作用セシメタルニ、「ピクロトキシン」、「ストリヒニン」並ニ「コデイン」、一次の動量(1%食器水ニテン倍=稀釋セル蓚酸血液ニ對スル築物 / 濃度, 以下之ニ準ス)0.5%以下ニアリテハ其凝固性ニ何等 / 變化ヲモ呈セズ、然ルニ「サントゾール」、小薬物量 0.05% 以下ニテハ凝固ニ何等 / 作用ヲモ呈セザレドモ, 0.1% 以上ハ抑制的ニ作用シ, 増量スルニ從ヒ次第=其作用增强シ, 0.5—1%ニ於テ正常凝固時間 / 約2倍ヲ要シ, 5%ニテ血液ハ不凝固性トナル、「テバイン」ニアリテモ薬物量 0.05%以下ニテハ何等 / 作用ヲモ呈セザレドモ, 0.1%以上ハ抑制的ニ作用シ, 0.5%ニテ其凝固時間ハ正常 / 2—3倍ニ達セリ・安息香酸「ナトリウムカフエイン」、一、薬物量 0.3%以下ニテハ凝固ニ何等 / 作用ヲモ呈セザレドモ, 0.5%以上ハ抑制的ニ作用シ, 1%ニ於テ正常 / 約2倍 / 凝固時間ヲ要シ, 2—5%ニテ血液ハ不凝固性トナル、「アンチピリン」、不薬物量 0.25%以下ニテハ凝固ニ何等 / 作用ヲモ呈セザレドモ, 0.5%以上ハ抑制的ニ作用ス・ボシテロで、1%にアンチピリン」、一、2%にアニアの凝固ニ何等 / 作用ヲモ呈セザレドモ, 0.5%以上ハ抑制的ニ作用ス・ボシテ1ー2%ニテ正常 / 2—4倍 / 凝固時間ヲ要シ, 5—10%ニテ血液ハ不凝固性トナレリ・

即チ試験管内實験ニ據レバ,之等物質ハ生體實験ニ於テ使用セシガ如キ少量ニテハ直接血液ノ凝固性ニ 殆ド作用セザレドモ,著シク大量ヲ血液ニ作用セシムレバ何レモ血液凝固ニ對シテ抑制作用ヲ呈ス・而シテ 其作用ノ初メテ發現スル量ヲ比較スレバ,「サントゾール」及ピ「テバイン」ハ 0.1%,「カフエイン」及ピ「アン チピリン」ハ 0.5% ナリ・而シテ「ピクロトキシン」並ニ「コデイン」ハ 0.5% ニ達スルモ血液ノ凝固性ニ對シ 何等ノ作用ヲモ現サズ.

斯クノ如ク血液ニ對スル之等痙攣毒ノ直接作用ハ蓍シク弱キモノニシテ、生體ニ適用セル際ハ之ヲ無視スルコトヲ得ルガ故ニ、前述ノ之等物質ノ血液凝固性及ビ血餅凝縮力ニ對スル作用ハ之等ニ對スル生體ノ 反應ナルコトヲ知ル・

總括及ビ結論

1. 本實驗ニ供セル諸種痙攣毒ハ血液ノ凝固並ニ血餅凝縮力ニ對シー定ノ作用ヲ有ス. 然レドモ其作用法ハ總テー様ニハ非ズ. 之等物質ヲ家鬼ノ皮下ニ注射スレバ,「ビクロトキシン」ハ少量ョリ大量ニ至ル迄(0.1—0.3 mg), 血液凝固並ニ血餅凝縮力ニ對シ全然抑制的ニ作用シ,「サントゾール」ハ少量(0.01 g)ニテハ兩者ニ對シ僅ニ催進作用ヲ現セドモ, 増量スルニツレ主トシテ抑制作用ヲ呈ス. [ストリヒニン](0.05—0.5 mg)及ビ[コデイン](0.005—0.03 g)ハ凝

固凝縮力共ニ專ラ催進的ニ作用ス、但シ薯シキ大量ニ達スレバ抑制作用ラモ現ス、「テバイン」(0.001-0.005 g) 及ビ「カフェイン」(0.01-0.1 g) ハ凝固ニ對シテハ主トシテ初期催進後抑制的ニ作用スレドモ、凝縮カニ對シテハ一般ニ抑制作用ラ來ス、「アンチピリン」ハ血液凝固ニ對シテハ少量ニ於テ僅ニ催進作用ヲ現セドモ、中等量以上(0.3-1 g) ハ薯シキ抑制作用ヲ發揮ス、然ルニ凝縮カニ對シテハ少量並ニ大量ニ於テ僅ニ抑制作用ヲ現スノミニシテ、中等量(0.2-0.5 g) ニ於テハ一般ニ催進的ニ作用ス、

- 2. 上記諸物質ヲ直接血液ニ作用セシムレバ、生體實験ニ於テ使用セシ分量ニテハ血液ノ凝固性ニ殆ド作用セザレドモ、著シク大量ヲ作用セシムレバ抑制作用ヲ現ス、而シテ其作用ノ發現ハ「サントゾール」及ビ「テバイン」ハ 0.1%、「カフエイン」及ビ「アンチピリン」ハ 0.5% ナリ、然ルニ「ピクロトキシン」、「ストリヒニン」 並ニ「コデイン」 ハ 0.5% ニ達スルモ血液ノ凝固性ニ何等ノ作用ヲモ現サズ.
- 3. 之等痙攣毒ノ直接血液ニ對スル作用ハ甚ダ弱キヲ以テ、夫レ等ノ皮下注射ノ際現ル血液 凝固時間及ビ血餅凝縮力ノ變化ハ之等物質ニ對スル牛體ノ反應ニ基クモノナリ、
- 4. 之等諸毒ノ内「ピクロトキシン」,「サントニン」(「サントゾール」),「ストリヒニン」及ビ「コデイン」ニ於テハ凝固時間ニ對スル作用ト凝縮力ニ對スル作用ハ略ポー致スレドモ,「テバイン」,「カフエイン」及ビ「アンチピリン」ニ於テハ兩作用互ニ平行セザルヲ觀ル.
- 5. 以上血液凝固並ニ血餅凝縮力ノ兩機轉ニ對スル痙攣毒ノ作用型ニハ2種ノ大ナル區別アリテ、從來痙攣毒ノ作用機轉又ハ侵襲點ニ就テ認メラレタル所ト興味アル一致ヲ觀ル. 即チ主トシテ痙攣中樞ニ原發的作用ヲ及ボスト稱セラルル「ピクロトキシン」及ピ「サントニン」ハ兩機轉ニ對シ主トシテ抑制的ニ作用シ、主トシテ脊髓ノ反射亢奮性ヲ高メテ痙攣ヲ誘發スト稱セラルル「ストリヒニン」及ピ「コデイン」ハ兩機轉ニ對シテ主トシテ催進的ニ作用ス. 而シテ他ノ三物質ハ兩者ノ中間ノ作用型ヲ示スヲ觀、就中「テバイン」及ピ「カフェイン」ノ作用ハ血液凝固ニ對シテハ少量及ビ初明ニハ「ストリヒニン」ニ類似シ、後期及ビ大量ニテハ「ピクトキシン」ニ接近シ、血餅凝縮カニ對シテハ共ニ「ピクロトキシン」ニ類似ス. 「アンチピリン」ハ血液凝固ニ對スル作用ニ於テハ寧ロ「ピクロトキシン」ニ近キガ如キモ凝縮カニ對スル作用ニ於テハ寧ロ「ストリヒニン」ニ類スルガ如シ.

(6.5.19. 受稿)

文 獻

1) 田中, 岡醫雄, 第40年, 第6號, 1103頁, 1928. 2) 高月, 岡醫維, 第42年, 第12號, 2908. 育、1930. 3) 高月, 岡醫雄, 第43年, 第7號, 1758頁, 1931. 4) 篠崎, **岡野雄, 第42年, 第5** 號, 1161 頁, 1930. 5) 篠崎, 岡陽雄, 第43年, 第5號, 1062頁, 1931. 6) Harnack u. Meyer, Zeitschr. f. klin. Med. Bd. 24, S. 374, 1894. 7) Harnack u. Hochheim, Ebenda Bd. 25, S. 16, 1894. 8) Zutz, Arch. f. exp. Path. u. Pharm. Bd. 38, S. 397, 1897. 9) 高橋, 間醫雜, 第39年, 第6號, 850 頁, 1927. 10) 山內, 岡醫維, 第40年, 第4號, 782頁, 1928. 11) 藤野, 岡醫維, 第41年, 第7 12) Rosenthal, Licht u. Lauterbach, Arch. f. exp. Path. u. Pharm. Bd. 106, S. 233, 號, 1514 頁, 1929. 13) 前坊, 京都醫學雜誌, 第 18 卷, 第 14 號, 143 頁, 1921. 14) 飯島, 兒科雜誌, 第 291 號, 15) Watanabe, Journal of Biol. Chem. Vol. 36, p. 531, 1918. 16) Györgi u. Vollmer, 1100 頁, 1924. Arch. f. exp. Path, u. Pharm, Bd. 95, S. 200, 1922, 17) 柳井及ビ矢吹, 兒科雑誌, 第278號, 527頁, 18) 吉村, 長崎醫學會雜誌, 第7卷, 第6號, 1929. 19) Partos u. Svec, Pflügers Arch. f. d. ges, Physiol. Bd. 219, S. 481, 1928. 20) 篠崎, 岡醫維, 第43年, 第4號, 1931. 21) 田中, 岡醫雞, 22) 篠崎, 岡醫維, 第43年, 第4號, 1931. 第40年, 第3號, 546頁, 1928. 23) Henocque, Gaz. 24) Huchard, Bull. et hebdom. 1884, No. 50, P. 820, Ref. in Schmidt's Jahrb. Bd. 204, S. 238, 1884. mem. de la soc. de therapeut (Seance du 24. dec.) 1884. Ref. in Berl. klin. Wochenschr. No. 43, S. 697, 1885. 25) 尾崎, 京都醫學雜誌,第11卷,163頁,1914.

615.789:612.115

Kurze Inhaltsangabe.

Über die Wirkung verschiedener Krampfgifte auf die Gerinnbarkeit des Blutes sowie auf die Retraktilität des Blutkuchens.

Von

Kenkichi Shinozaki.

Aus dem pharmakologischen Institut der Med. Universität Okayama, Japan (Vorstand: Prof. Dr. K. Okushima.)

Eingegangen am 19. Mai 1931.

1. Jedes der zum Versuch verwendeten, verschiedenen Krampfgifte hat beim Kaninchen eine, wenn auch nicht eindeutige, so doch gewisse Wirkung sowohl auf die Gerinnbarkeit des Blutes als auch auf die Retraktilität des Blutkuchens. Bei subkutaner Darreichung wirkt Pikrotoxin in kleineren bis grösseren Dosen (0.1—0.3mg.) auf die Gerinnbarkeit und die Retraktilität ebenfalls hemmend. Santosol (Santoninsaures Natrium) übt in kleineren Dosen (0.01g.) zwar eine leicht fördernde Wirkung, aber in grösseren meistens eine hemmende Wirkung auf die beiden aus. Strychinin (0.05—0.5mg.)

und Codein (0.005—0.03g.) wirken hauptsächlich fordernd, in sehr grossen Dosen aber hemmend. Thebain (0.001—0.005g.) und Coffein (0.01—0.1g.) wirken auf die Gerinnbarkeit des Blutes zuerst fördernd, dann aber hemmend, während sie die Retraktilität des Blutkuchens in der Regel hemmen. Antypirin hat in kleineren Dosen bei der Blutgerinnung eine schwache Förderung, aber in mittleren bis grösseren Dosen eine starke Hemmung zur Folge, auf die Retraktilität wirkt es jedoch in kleinen wie in grossen Dosen schwach hemmend und in mittleren Dosen (0.2—0.5g.) in der Regel fördernd.

- 2. Direkt dem Blut in vitro zugesetzt wirken die oben genannten Krampfgifte erst in hoher Konzentration auf die Gerinnbarkeit, und zwar in allen Fällen hemmend. Die Grenzkonzentration beträgt bei Santosol und Thebain 01%, bei Coffein und Antypirin 0.5%, Pikrotoxin, Strychinin und Codein sind auch in 0.5% noch unwirksam. Die direkte Wirkung dieser Stoffe auf das Blut ist also viel schwächer und von anderer Art als ihre resorbtive Wirkung.
- 3. Unter diesen Krampfgiften geht bei Pikrotoxin und Santonin (Santosol), Strychinin und Codein die Wirkung auf die Gerinnungszeit und auf die Retraktilität etwa parallel, während bei Thebain, Coffein und Antypirin dies nicht der Fall ist.
- 4. Es gibt zwei verschiedene Wirkungstypen der Krampfgifte hinsichtlich der Wirkung sowohl auf die Gerinnbarkeit des Blutes als auch auf die Retraktilität des Blutkuchens. Sie stimmen interessanter Weise mit denjenigen überein, die Autoren betreffs des Wirkungsmechanismus oder des Angriffsortes der Krampfgifte augenommen haben. Pikrotoxin und Santonin, welche hauptsächlich primär das Krampfzentrum angreifen, wirken auf diese beiden Prozesse in der Regel hemmend, Strychinin und Codein, welche durch Steigerung der Reflexerregbarkeit des Rückenmarkes zum Krampf führen, wirken dagegen fördernd. Die 3 übrigen Stoffe stehen hinsichtlich ihres Wirkungstypus zwischen den 2 obigen Gruppen.

->=